

---

# オリジナル番外編集

蜜ハチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オリジナル番外編集

### 【Nコード】

N24720

### 【作者名】

蜜八チ

### 【あらすじ】

オリジナル連載中「愛なんです」「家出した女神」の番外編集。  
表記…

愛なんです 愛番外編

家でした女神 女神番外編

愛番外編　：　ペディキュア（前書き）

「森の番人クロイツ家」当主のエーデルの昔の恋話。

本編ではまだ本性を出していないので驚かれるとは思いますが、そこも含めてお楽しみください。

コメディー要素一切なしのドシリアスです！注意！！

キャラクター

クロイツ・ド・リュ・エーデル伯爵

「深森の番人」とよばれる一族の当主様。本編ではまだ好青年。

ケイト・ルチア

「お菓子屋ケイト」の一人娘。18歳。

愛番外編       ：   ペディキュア

貴女がルージュを綺麗に塗ってペディキュアまで施して

そうして妖艶に笑んだら…私は泣きたくなる

r u c h i a   奇跡の女   神を愛し捧げた君よ

どうか哀れみを

愛なんです番外編：ペディキュア

伸びた足の先が赤かった。

ペディキュア、人工的な真つ赤な色が白い足を尚更白く見せていて筋肉質の脚からそこだけ浮いて見えた。

ルチアはそこだけこの人がこの人ではないような妙な違和感を覚えて、眉をひそめてそれをベイビーピンクの指先でパチ、とはじいた。

ペディキュアの端が欠ける。

それを見やってルチアは男の足に体を寄せた、慣れた骨ばった筋肉質の脚だった。

「赤い爪の方が好きなんですか？」  
「… たまたま赤い爪だっただけ」

男はぞんざいに言い放って、足の先を曲げて伸ばす、やはり妙だった。

そう、とルチアが呟いて穿きだしの足に頬をすりよせる。  
石鹸の香りがする、きっと私が来る前にシャンプーを浴びたのだろう。

上等な石鹸の香り、貴族でもなんでもない、町娘のお菓子売りには

馴染まない馴染むこともなさそうな香りでもいつも嗅ぐというのにいつまでも鼻について慣れない香り。

ルチアは町娘だ、街で、家業のお菓子屋の一人娘。古いだけ  
が特徴のさして儲かりもないお菓子屋。  
そしてやせ気味の小さな体、醜顔でもないが美人でもないそばかす  
の浮いた顔。

コンプレックスだった、何もかも、この人の前に立つたびそれは何  
度も目の前に聳え立つ。

昔は、 違かったのに、価値観が彼女を小さくする。

ルチアとエーデル。二人は幼馴染だ、けれど小さいころから二人の  
立場は違う。

エーデルは「クロイツ家」と呼ばれるこの街の英雄の血縁者の家柄  
で今現在もその権力は生きており、街の権力者だ。  
その遊び相手にと連れられてきたのが、「クロイツ家」と昔から縁  
のあった「ケイト家」のルチアだった。



初めて会った時からルチアは敬語を使い、エーデルは何の疑問も持たず敬語を使わずに彼女と遊んでいた。

エーデルはルチアを引っ張って自分の遊びに付き合わせるのが好きで、彼女に我儘を言うのも好きだ、何故ならルチアは彼の言うことなら大抵のことは聞くからで、そうして我儘を許してもらうことでエーデルは満足する。

エーデルは器用な子供であった。「外面」は綺麗な顔で綺麗にほほ笑んで綺麗な敬語を使う、クロイツ家の子供。

二人きりの時はエーデルは自分にため口なのに、誰かしらいると敬語を使う、子供心ながらにそれが奇妙に感じたことを覚えている。

そんな関係だったから、ルチアは今こうして、惨めな思いをしているのだろうか？

答えはあるのかもわからない。ないのかもしれない。

どちらにしろ、現実是不変ならないのだからもんだいはない。

ルチアは目を閉じる。触れ合う体温と、香りだけ。

それが悲しいけれど吐き出せない自分が惨めで黙っている。

男が、頭を撫でた。「ルチア」と男が囁いて呼ぶ。

そうするだけで、彼の言うことを享受する自分がいる。

…きつと、この男の目から見た自分はどんなに哀れで醜い女なのだろう。

惚れられた者勝ち、とはよく言ったもので  
早い話、世界はそれを規則に回っていると思うのだ

どうにもならない現実、こんな立場

泣いてどうにかならあなたの前でも泣けるのに

R u c h i a , 人の感情は 時に人を殺し 生かす  
R u c h i a , キリストに身を捧げた君よ、貴女よ  
恵みを  
∴ どうかお

「エーデル様」

名を呼んでみた、起きない寝顔に。  
脇の窓からさした月光が、レースのカーテンを越えてベッドを照らす。

まるで人の願望を形にしたかのように、男は綺麗だ。

「…エーデル」

ルチアは枕元で上半身だけ起こして自分の腰に腕をまわし眠る男を見下ろしている。

男の上品で端正な顔のせいか、青白い月の光で淡く光り生き物のようには見えない。まるで作り物のようだ。

額に零れる髪を、指先でちよいとつまんで避ける、男は起きず沈んだように眠っている。

ため息をついた、ルチアの横顔が尚のこと寂しげにうつる。

「さよなら、もう会えませんが」

男の目が開く。

ルチアはそれに驚く様子も見せず、こちらを凝視する男を変わず眺めている。

蒼と緑の瞳がゆらりと光を吸い、震えるまつ毛が光を透かして美しくかった。だから自分が嫌いになる。

エーデルがのっそりとからだを起こした、右手でルチアの手を握ったまま　手の関節が、痛い。

何時だったか、彼の姉が嫁入りした日からルチアはこの館に泊まり込むようになった。

それはもちろん彼が「来い」と一言彼女に言った時に決まった…ルチアはこの館から店に行き家に帰るのだが、そうすれば彼の命令を持った使いが家に毎日来るようになったのであきらめてこの館に帰る。

…それでもこのシーツは、嫌いだ。

「さよなら、エーデル」

それだけ言つとルチアは妙に胸から重石が落ちたような、すっきりとした。

彼は、この言葉の意味をわかっているのだらうに、何も言わずにこちらを見るだけだ。

目を見開いて…まつ毛が震えていた、左右違う目の色が綺麗だ、騎士になるために鍛えられた体がわなないていた。

身動きしない男にルチアは何度かゆつくりと瞬きをする、。

体に触れるシルクのシーツ、沈むほどに柔らかな大きなベッド、二人を隠す天街。

「私もう18なの」

「結婚したいのか？」

やつと男が声を出したが、それは彼らしくなく震えていた。男が息を吸う。

手の痛みが増す、男の握る手に力が入って爪が食い込む。それでもルチアは悲鳴を上げず眉をひそめる。

「ルチア、結婚したいのか、誰と？店のためか？自分自身のため？」  
「全てです」

ルチアが男を見据える。

布団からはみ出す男の足が見えた、赤いペディキュア。男に似合わない女の武器だ。

なんて相も変わらず　なんて綺麗な男。　なんて器用で賢くする男。

「私は　あなたが大嫌いだ」

ルチアの小さな体がベッドから落ちた。大きな音を立てて。



ルチアは打たれた頬を片手で押さえつける、口の端から切れた血が落ちた。

殴られた、エーデルに。

初めてだった、エーデルに殴られたのは。

男は立ち上がって 窓を背にこちらを見下ろしている。

逆光で男の顔が見えない けれど、ひしひしと恐怖が身をすくませる。ジンジンと痛む頬のせいだ、ルチアは今まで零れなかった涙をばろばろとこぼした。

「う、あ・・・」

痛い、痛い、痛い、

「ルチアのくせに、」

男が低く唸る。

「ルチアのくせに！！」

エーデルはベッドから足音をたてて落ちると乱暴にルチアの腕をつかむ、ルチアはびくりと体を反応させ悲鳴がこぼれたが拒絶できずにそのままベッドに投げ飛ばされた。

乱暴に投げられたせいでベッドの柱に頭を強かに打ちつけ、鋭い痛

みが走り、頭を抱える。ぬるりとした、感触があった。涙で、  
視界がゆがむ、頭がぐらぐらと沸騰しているようだ。

「ルチア！！！」

鼻の奥が痛い、目が痛い、頭が割れて痛い、頬が腫れて痛い、唇が切れた、  
ぐい、と髪を掴まれて無理やり顔を引き起こされる、ルチアの顔に髪がはりつく、前が髪と涙のせいでよく見えないがエーデルが自分の顔を睨んでいる　涙がこぼれて、少し鮮明になる。  
エーデルが、ゆっくりと口を開く。

「さよならじゃない、お前はここにいるんだ」

頬を涙が伝う、きつと自分は、今さらだけれど、醜い顔をしているだろうに。

ルチアは自然と自分の腹に手を回した。

「…殴らないで」

「お前が言うことを聞くなら」

「…エーデル」

「…なんでだよ、」

…髪から手が離れる。ルチアはどさりととベッドに倒れた。

ルチアが抵抗できないまま、エーデルがルチアを抱きしめる、強く。そうして胸元に顔をうずめる。

「なんでだよ、」エーデルの声がちいさい。

「ほかの女のせいだよ、ならもうしない、お前しかいないから、それとも金か？店のため？なら俺が出すから、足りないならもっと稼いできてやるから、それを全部お前にやる、一生働かなくてもよくしてやるから、」

独り言のようだった、それでもこれは独り言ではないのだろう。

「権力だって、小さいけどあるよ。もっと偉い奴のがいいのか？なら有名になるから、お前がえられるようにするよ、なんだって欲しいのやる、なあ、なあ……」

…エーデルが顔を上げる。…なんて情けない顔をしているのだろう、苦痛のゆがんだ顔。

「俺がお前を愛してるの 知ってるくせに、」

ルチアは、エーデルの頭を撫でた。

そう 知っている、彼の執着心も、愛情も、酷い束縛もその裏返し  
の我儘も、ぜんぶ。

けれど、だからこそ私が不安になるのをあなたは知らない。

「あなたの子供がいます」

男がガバツと顔を勢いよく上げる、驚愕の顔、そして  
その裏  
に狂喜がかすんで見えた。

ルチアのまだ膨らんでいない腹に手を当てようとして  
ルチア  
がそれをとどめた。

その手の甲に走る爪痕から血がにじんでいる。

「うれしいですか？」

「…うれしい」

エーデルはさっきまでの悲しみはなんのことやら、といった様子で  
とがめられている手を避けてその腹に触れた。そして優しく撫でる、  
見下ろす彼の表情は本当にうれしそうで、目を細めてルチアの腹を  
眺めていた。

目が、鈍く光っているのをルチアは見下ろして、エーデルの手に手  
を重ねた。

「良かった」

そうしてルチアもほほ笑んだ。エーデルがルチアの表情を見て、尚  
一層顔をほころばせた。

エーデルがルチアを抱きしめて、キスをした。何度も優しく、つい  
ばむようなキスを。

あなたといると私は惨めになる　容姿も立場も全て嫌いな私は貴方がまぶしかった

夜の草道を革靴の底を鳴らして歩く。月夜で道はまだ明るく、人のいない街並みが照らされて昼間とは違う表情を見せている。

ルチアは抱えた荷物をもう一度肩にかけ直して、夜の街をひた歩く。置いてきた手紙を見て彼は自分を探すだろう、憤慨するだろう。

そうなら、少しうれしいけれど。

わかつているのだ、彼と結婚できないことを。妾としてしか結婚できないことも。正妻をめとることも、彼は平気で浮気できる男だから。

彼のペディキュアを思い出す、赤い女が存在。

はらわたが煮えくりかえるかと思った、目の前が真っ暗になった、泣きそうになった、そして悔しかったのだ。

彼を愛している自分が、なんとみじめなことか。  
彼に裏切られる自分が、なんと悲しく孤独なことか。

悟ってしまったのだ、それを見た瞬間、自分は妾では我慢ができない女なのだと。

ただ子供の存在をばらしたのはささやかな復讐だったのだろう。  
あんなに喜んでいたものを、私なんかに奪われるだなんて、なんて  
かわいそうなのだろう。

はじめは言うつもりではなかった、奪われると思ったから、この子は欲しかったから。

けれど彼が憎くて言ってしまった…子供には悪いことをしたかもしれない、何もなければ良いのだけだ。

ルチアは夜道を歩く、跡には靴音が残るだけだった。

愛番外編：ペディキュア（後書き）

クロイツ家は デレというオプションがついております（笑

姉 ツンデレ

弟 ツンツンツンツンデレデレドロドロ…

弟がきしよいことになってる！笑



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2472o/>

---

オリジナル番外編集

2010年10月15日17時34分発行